

第128回 令和7年11月20日（木）

「想定外の災害について。」

歴史の教科書に出てきて、私たちの住んでいるこの神奈川も大きな被害が出たのが「関東大震災」。それから私が教員になったばかりのころに起きたのが「阪神淡路大震災」。そして記憶に新しいのが「東日本大震災」。そのあいだにも石川・能登を襲った大地震や熊本城を崩壊させた熊本地震などがおきており、日本は改めて地震大国であることを思い知らされます。

関東大震災では火災で多くの方が亡くなりました。グラウンドに避難してもそこで火災旋風という高温の竜巻が起こり人々を死に至らしめました。

阪神淡路大震災の被害は「圧死」、つまり建物に押しつぶされたことによる犠牲です。地震発生から数秒で亡くなった方が非常に多かったことが特徴です。

東日本大震災は津波の犠牲者が多数にのぼったことは記憶に新しいところです。想定以上の津波で多くの方が流されましたが、現在も津波警報や注意報が発令されることがあると不安が募ります。

関東大震災の後は「グラっときたら火を消す」ことが標語のように言われました。誰もが火の用心に注意したのですが、阪神淡路大震災で家の中で圧死が増えたこととの因果関係は不明です。

一方東日本大震災では家からの避難は比較的スムーズにできました。家の耐震構造が普及していたこともあったかと思いますが、津波に関してはある程度時間があつたにもかかわらず避難せず犠牲になった人が増えてしまいました。

災害が起きるとパニックになるので人間は1つか2つくらいしかできないのかもしれませんが。命を脅かすリスクが複数あるとバイアスがかかって「きっと大丈夫に違いない」と思い込むことが多くなります。

想定外の災害にどう備えればよいのか、やがて来る南海トラフや首都直下型地震にどう備えるべきなのか。超高齢化が進んだ将来においては震災後の要救助者などが増える可能性もあります。

リスクマネジメントは日ごろからの「不安」を見過ごさないことが大切です。学校にいる間ではなく登下校中に地震に襲われたらどうするか、休日の部活遠征中に何かあったらどうするか、心配性は人類が生き残るための知恵です。

「天災は忘れたころにやってくる」のが真理です。「自分は生き残りそうな気がする」では足りません。どうやったら生き残れるのかを考えてみてください。